

読書2

「バブル期以前まで、自分が『何もの』であるかは、消費行動によってではなく、労働行動によって示すものだと教えられてきた。」

↓

「『何を買うか』ではなく『何を作り出すか』によってアイデンティティは形成されていた。」

「自分が作り出したものの有用性や、質の高さや、オリジナリティによって他者から承認を得た。」

↓

八十年代の消費文化は、価値基準を「労働」ではなく「消費」にルールを変えて、『何を作り出すか』より『何を買うか』を基準に人間の価値を踏みをするようになった。

↓

「有用なものや価値あるものを作り出すことより、最も少ない努力で、最も効率よく、最も大量の貨幣を獲得できるのがよい労働であるという価値観に変化し、費用対効果を考えると、できるだけ少ない学習努力で、できるだけ価値の高い学位記を手に入れることができるかが最優先事項となった。」

↓

学力を高めることより、費用対効果が教育の目的となったのではないか。無駄なことはなるべくしない、努力はなるべく最小限で、同僚の才能を开花させるような会話をしない、自分の損失となることは手を出さない教育が尊ばれるようになってはいまいか。

今読んでいる内田樹の「街場の共同体論」の一節です。極端な部分もありますが、ある意味で、教育の本質を多角的に論じているとって過言ではないと思います。

本質的な部分の考え方を失わず、学びを充実させる取組を続けていかなければと改めて思ったところです。